

## 国際総合学類

学生の確保 (人)	年 次		定 員	志 願 者	受 験 者	合 格 者	入 学 者	
	1 年 次		80 ※ - ( 80)	545 ※ 6 (458)	545 ※ 6 (458)	97 ※ 3 ( 95)	89 ※ 3 ( 85)	
	編入学・再入学		- ※ - ( -)	- ※ - ( -)	- ※ - ( -)	- ※ - ( -)	- ※ - ( -)	
学生の進路 (人)	卒 業 者	就 職 者	就 職 者 の 内 訳			研 修 医	進 学 者	そ の 他
			企 業	教 員	公 務 員			
	107 ※ 13 (103)	66 ※ - ( 66)	57 ※ - ( 61)	1 ※ - ( -)	8 ※ - ( 5)	- ※ - ( -)	20 ※ 7 ( 15)	21 ※ 6 ( 22)

・ ( ) は前年度の数値を、※は外国人留学生を内数で示す。

### 1 国際総合学類の活動

#### 〔教育〕

国際総合学類は、グローバルな視野を有し国際舞台で立派に活躍できる人材の育成を目標として、社会科学を中心に人文及び環境・情報工学等を含む「学融合」教育を実践している。今年度は平成16年度の国立大学法人化を控えて、学類の中期目標・中期計画、学類スタンダード、学群再編に当たっての対応等について、活発な議論を行った。さらに検討作業を続け、法人化後の運営に備える。

文系工系を融合した総合教育を目指す当学類のアドミッション・ポリシーについて再検討し、必要とする大学入試センター試験科目を見直すなどの改革を、平成16年度入学試験から実施した。また、7月に行われた国際総合学類説明会には487名の参加者があった。

本学類では、上記教育目標を達成すべく授業科目の三分の二程度を英語で教授すること、及び帰国生徒、国費・私費留学生、JTPを中心とした短期交換留学生を積極的に受け入れることに努めてきた。平成15年度においても、部局間及び全学の交流協定校をさらに拡大し、学生の派遣とその受け入れについて積極的に対応した。派遣学生は21名（アメリカ15、オーストラリア1、韓国1、ドイツ1、イギリス1、ロシア2）、受け入れた学生は6名（アメリカ）である。はじめてサンクトペテルブルグ大学に2名の交換留学生を派遣した。そのほかに語学研修を目的とした留学15名、海外インターンシップ2名にのぼる。

本学類の学生は外交に強い関心があることを考慮して、本年度は現役の外務省総合外交政策局安全保障政策課課長補佐を招いて外交講座を開催した。

また、インターネットを基盤とする情報通信技術は学類共通の基礎スキルであると認識し、学生組織である「Knights」に学類コンピュータ室の管理、「Bishop」にWEBページの管理をさせ、IT実務経験を積みせるとともに内容の充実にも努めた。また、将来のアジア地域とのネットワークe-ラーニングによる交流を視野に入れた遠隔教育の実験を、タイ国アジア工科大学及びマレーシア国マルチメディア大学との間で実施した。

#### 〔学生生活〕

学類紹介誌「明日のExecutive」を就職活動が始まる前年秋には全国の主要企業に配布して、学類教育の内容及び学生を紹介し、就職市場の開拓に努めた。学類主催の就職ガイダンスを行い、多数の企業および学生の参加により盛況であった。また、クラス連絡会を2回開催し、学生の要望の把握に努めた。

平成12年度から取り入れたインターンシップに関しては、外国でのインターンシップを行う学生もおり、内容的にも充実し、制度が定着してきたことがうかがえる。

### 2 教員の教育業績評価の状況

ゼミ説明会を利用して学生に対する「教育アンケート調査」を実施し、学類の教育体制全体を評価した。調査により明らかになった問題点を教員会議に報告し、改善策を立てるという方法をとっている。これとは別に前年度に引き続いて、多くの授業科目で「学生による個別授業評価」を実施した。さらに、将来の全面的な導入を考慮し、全授業科目に対する「学生による授業評価」の導入について議論した。

### 3 自己評価と課題

平成16年度には学群・学類の再編の議論が本格的に行われようとしている現在、カリキュラムにとどまらず学類全般にわたる自己点検・評価の実施を継続する必要がある。特に、文系工系を融合した学融合教育を目指す当学類の理念を、学内外に広く理解してもらい必要がある。また、学類教育と大学院教育との連続性について自己点検・評価する必要がある。